

# 在日ネパール人の異文化体験

——自己認識・他者認識の関係性を中心に——

比較教育社会学コース 中 柴 春 乃

Nepalese Intercultural Experience in Japan :  
The Change of the Relation Between the Self and Other.

Haruno NAKASHIBA

In contrast to modernism, the postmodern view underscores the ways in which realities are constituted personally or socially, and one's self or identity is viewed as a process or as a constituted subject. It assumes that human being and culture are mutually constructed. The transfer of residence from one culture to another is not only a change of a sociocultural environment but also accompanied by the restructuring of one's self, identity and meaning system. This paper proposes to investigate the latter process, especially how they recognize the self and the other. Thus the approach is phenomenological because the subjects find, accept and construct the reality around them.

Regarding this matter, the interview was held with 24 Nepalese those who has been living in Japan. In the beginning, they were very conscious about the nationality. As they live longer, they change, that is, they judge people not as Japanese or Nepalese but as an individual. It is shown that the way to recognize their self and the other is deeply connected and that relation is interdependent. By adopting the 'relation' between self and other as a central concept of the analysis, the change of how they recognize the self and the other can be seen as a change of categorization. As a result, it shifts the boundary between the self and the other.

## 目 次

## I. 序章

### I. 序章

- A. 構築主義的セルフと異文化体験
- B. 研究方法

### II. 自己・他者認識の変化

- A. 異文化体験のうけとめ方の違い：3つの事例
- B. 他者認識の変化
- C. 自己認識の変化
- D. 相補的自己・他者認識

### III. カテゴリーの再構成の場としての異文化体験： 理論化にむけて

### IV. 終章

- A. 「関係性」からみる自己・他者認識：3事例の解釈
- B. 「関係」と「変化」の心理学

### A. 構築主義的セルフと異文化体験

社会行動科学のポストモダンへの展開のなかで、心理学では個人を歴史的/社会的文脈に位置づけられた構築物として理解するという流れが生じている。Cox & Lyddon(1997)は、ポストモダンはセルフとアイデンティティに対し次の4つの見方をもたらしたと指摘した。①セルフ理論としてのセルフ (self as self theory), ②発達のプロセスとしてのセルフ (self as evolving process), ③超越的セルフ (transcendent self), ④語りとしてのセルフ (self as narrative)。いずれもセルフをプロセスとして、かつ構成されるものとしてみている。

また、人と文化とが相互に浸透しあうものであることも強調されている(例えば文化心理学：Shweder, 1990, コール, ワーチ)。ワーチ (1995) は、「環境や個人を孤

立させた形では、精神機能の理解は不可能である」と考え「行為」を「環境と人間の精神機能の総体から体现してくるもの」ととらえ分析の単位とした。「行為」を、個人と外部の相互作用を凝縮した単位とみなしたのである。

外国への移動という異文化体験は、個人をとりまく社会文化的環境の変化であり、国境を越えるということが、社会制度の上でも、心情においても大きな影響力をもつ。生まれ育った社会文化的環境から、別の環境への移動を個人がどう体験しているかをみることによって、個人と文化の関係が明らかにされやすくなるとの立場にたち、箕浦(1990)は個人が文化をどう構造化して内在化させているかを明らかにした。また、Bandlamudi(1994)は、移住年齢と母国への帰国の頻度が、文化と人の関係の理解の仕方のちがいを生じさせていることを明らかにした。

しかし、多くの異文化体験に関する研究は、この様に異文化体験を解釈する枠組みを提示することはなく、体験の記述が多い(Torbiorn, 1994)。それらは「文化の違い」を前提とし「文化の違い」を理由とすることに終わっているといえる。そして多くの研究は、適応/不適応、文化化される/されないを異文化体験の結果と設定している。そこにおいては、個人の変化は一元的にとらえられ、新たな個人が生成されるという視点はあまりみられない。個人を新たな環境に対し受動的な存在として扱うことが多く、能動的主体としてとらえきれているとはいえないのである。

異文化を体験する個人の文化的背景だけでなく、個人のパーソナリティ要因や滞在目的によって適応にかかわる要因が異なるように(Zeng & Berry, 1991)、また、農村から都市への移動によって伝統文化への評価が変わるように(Dawson, 1967, 1969)、客観的「異」文化とその主観的重要性にはズレがあり、異文化体験の主体の意味世界を重視すれば、何が「異」文化であるかということさえ研究者が一律に設定することはできない。したがって、異文化体験を解釈する枠組みの構築のためには「人が意識のなかで客観的世界の像をどのように構成し確立してゆくか(小坂他, 1990)」を、つまり現象学的枠組みからのアプローチによって明らかにすることが有効と考えられる。

また、個人の変化をより柔軟にとらえるためにはどのような解釈枠組みが有効なものであろうか。つまり個人とその存在に不可欠な外部の相互作用をとらえるために適切な分析単位を考える必要がある。この時、「個人/社会の対立は、それを包含する自己/他者の関係を同じように、

弁証法的なあれかこれかとしてではなく、むしろ両者がそれぞれに相手の他者性を所有するさまざまな度合いとして概念化されなくてはならない」(ホルクウィスト, 1994)とするバフチンの「対話」概念が有効である。バフチンの「対話」概念では、自己と他者との相互作用を通して意味が構成されることが強調されている。「意味」はことばの中にあるのではなく、話し手の心の中にあるものでもなく、聞き手の心の中にあるものでもなく、話し手と聞き手とが行う相互作用[コミュニケーション]の効果」(バフチン, 1980, p.227)であるとの指摘は示唆に富む。「意味」を媒介とすることで、個人(自己)と外部(他者)の両方を同時にとらえることができる視点が示されているからである。

本研究では上述の枠組みにもとづき、当事者が文化の違いをどううけとめているのかを明らかにし、特に国籍の違いの意味づけ方の変化に着目し、個人の内的変化とらえることのできる解釈枠組みを提示することを目的とする。文化と相互構成的関係にあるものとしての個人をどう描くかということは、これからの心理学の課題であろう。本研究は、そうした存在としての個人をとらえるための試みとして、自己認識と他者認識の「関係」を軸に、対象者の主観的世界を描くものである。

## B. 研究方法

対象者は日本に住む24名のネパール人である。その内訳は就学生8名、留学生8名、留学後日本で就職した者8名である。在日年数は4ヶ月から19年に及ぶ([表1])。対象者をネパール人に限ったのは、社会文化的環境の変化をできるだけ統一することで、文化間移動の影響をより明らかにできると考えたからである。対象者の出身国が複数の場合、個人の変化をとってもそれはそれぞれが内在化させてきた「文化」によるものなのか、それとも「異文化体験」によるものなのかを見極めることが難しいためである。対象者の属性として「留学」という共通項を考慮したのも同様に、個人の変化をよりみやすくするためである。また、「途上国」ネパールから「先進国」日本への移動という点も筆者にとっては興味深かった。来日の背景には、国家レベルの経済や技術水準の格差が要因として関わっている。個人の心的過程というマイクロレベルと文化との関係を考える上で、マクロ要因の関わりがより顕著になると考えられるからである。

対象者の意味世界を明らかにするためにインタビューの手法をもちいた。インタビューは一人につき1時間から1時間半おこなわれた。予備調査の結果、対象者にとっては、移動にともなう物理的環境の変化よりも、人間関

係の変化の方が大きな意味を持っていることがわかった。そこでインタビューの質問項目は、人間関係と、現在いる場への自己の位置づけを中心に尋ねるものとなった。

表1 インタビュー対象者の在日活動（在日年数別）  
[単位：人（男，女）]

在日年数 以上～ 以下 活動	～1年		1年～3年		3年～5年		5年～10年		10年～		計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
就学	4	3	1								8
留学			2	1	4	1					8
就職					2		2	0	3	1	8
計(男,女)	7(4,3)		4(2,2)		7(6,1)		2(2,0)		4(3,1)		24

就学：日本語学校，専門学校に通っているケース。

留学：大学，大学院に通っているケース。

就職：留学/就学を経て日本で就職をしたケース

以下II章では、面接の結果明らかにされた自己認識と他者認識の変化を、III章では、本研究で得られた知見として、それらの関係についての理論的考察を行う。

## II. 自己・他者認識の変化

本研究は、以下の3事例を、自己認識と他者錦の「関係」に焦点をあてることによって読み解くことを試みる。それは異文化体験の新たな解釈を試みることになる。

### A. 異文化体験のうけとめ方の違い：3つの事例

次の〈事例1〉は、在日3年7ヶ月になるネパール人留学生（大学生，男性）が、アルバイト先のインド料理店での経験を語ったものである。

〈事例1〉（筆者補足）『』は二人の会話

（対象者はウェイターとして働いているが、閉店の管理をまかされるなど、店長から信頼されているという自負がある。夕刻来店した一人の客が、時間を過ぎたランチのメニューを注文するが、対象者は断る。次にその客は、持ち帰りのできないセットメニューを持ち帰りにしてほしいと対象者に言う）

（客：）『じゃあこれお持ち帰りして下さい』

で、メニューに書いてあるんですけど、「セットに限り、あと（その他のメニュー）は全部お持ち帰りできます」と書いてあるけど、（対象者：）『すいません、セットなのでできません』

（客：）『いいよ、いいよ、ここは日本なんだから』と。

その時、え、「ここは日本」だけど…。日本だから、これルールだよ、守らなきゃいけないでしょ。その時、やっぱり日本人にはそういうこと言えないだろ、と思った。言わないでしょ。

そういう時もありますね。我慢するしかないですよ。やっぱりお客さんに対しては変なこと言えないんだけど。…ん。で、キッ

チンに行って、お願いして、あげたけど、でも絶対あげたくなかった。でも、「ここは日本だよ」。

すごくショックをうけた。その時、もうすごい。そうだ、そういう時ね、すごい感じますね。

『ここは日本だよ』という客のことばに、彼はなぜ「すごくショックをうけた」のだろうか。彼はこのような場面での日本人とのやりとりで自分がネパール人であるということを強く感じるという。例えば、アルバイト先の「おばちゃん」のことば使いが、他の日本人アルバイト者に対するよりも自分に対する時の方が丁寧だと感じる時などである。

来日間もない時期には、自分は「日本人」のなかの「ネパール人」であると常に意識しており、上と同様の場面でもそれほどのショックをうけることもない。例えば、来日4ヶ月の就学生（日本語学校生，男性）は、自分は周囲から特別視されていると感じているが、そのことを次の様にわりきってうけとめており、特別に悲しく思うことや反発を感じることは少ない（〈事例2〉）。

〈事例2〉

電車に乗るとみんなそういう風になる。たぶん、顔の形とか見て知ってるんでしょうね。日本人じゃない、という（こと）を。電車に乗るとみんな見る。日本人じゃない。でも、今まで差別とかそういうのはなかった。…もちろん自分の国と外国人は違いますよね。CLOSEはできるけど、MIXはできない。

一方、〈事例1〉の留学生と同様の経験について、別の留学生（在日4年5ヶ月，大学生，女性）は次のようにそれをうけとめている。

〈事例3〉

まあそれはその人間がそう言ってるんだから、日本人がまるきりそう言ってるんじゃない。でもそういう人に会ったことある。いい人と悪い人どこの国にもいるから。個人によって違うから。この人わかってないんだなと。それだけです。来たばかりの時だと興奮するんですよ。でも長くなってくると興奮しなくなっちゃうんですよ。

はじめは「興奮した」ということばから、ある種ショックな体験であったことがわかる。

しかしインタビュー時には、「この人わかってないんだ」「個人によって違うから」と理由づけ、「興奮しなくな」っている。この変化はどう解釈することができるだろうか。

以上の3事例を時間軸にそって並べ、3人の対象者の日本とネパールへの評価の両方をあわせて示すと、「日本への積極的関心とネパールへの否定的評価」「日本への否定的評価の芽生えとネパールの再評価」「日本・ネパールそれぞれの受容」となる。これは、Oberg (1960) によって指摘された、ホスト国への適応過程（4段階）「魅了期」「敵意期」「適応期」「適応の完成」と重なる。こうした段

階の移行の背景にある個人の変化はどの様なものなのだろうか。

## B. 他者認識の変化

ほとんどの面接対象者が、日本人は「やさしい」「礼儀正しい」というイメージを持って来日している。それはネパールで出会った日本人旅行者の印象であり、欧米人やインド人の旅行者との比較のなかで形成されたものである。意味づけと比較は不可分の関係にある。比較の対象があつてはじめて意味づけることが可能になるのである。

来日後には「忙しい」という形容が、日本人の印象として最も多く聞かれた。この時比較の対象とされているのは「ネパール人」である。ネパール人は「ゆっくり」していたのだとその後認識されている。日本人とネパール人が比較され、相対化された最初の印象はこの「忙しい/ゆっくり」である。

日本人とネパール人の違いとして見えてくるものは、一様ではない。2国間にあるとされる客観的差異は比較対象があつてはじめて成り立つものであり、主観的に重要な差異は可變的である。

在日体験は、日本人とネパール人はどの様に異なっているのか、比較される側面(レベル)が変化する過程とえる。日本で暮らし日本人と接するなかで、ネパール流のつきあい方と日本流のつきあい方があるということを知る。それまでの表面的な違いのほかに、日本人とネパール人の人とのつきあい方のちがいが指摘されるようになる。それまで自明視していた対人関係の文法が通用しないときに明らかになり、そうした体験を通して、ネパールの人間関係についても相対化する視点を持つようになる。認識される違いはその深さによって次の3つに分類された。行動レベルの違い/思考レベルの違い/時間的・空間的広がりを持った違いである。2者の比較は、始めは可視的な行動のレベルでなされる。次にその行動を規定している思考プロセスについての比較(思考レベルの推察)がされるようになる。そしてそれらの違いは、社会的なものであり、育ちによって規定されているのだと解釈する。つまり、両国間の違いを、空間的・時間的ひろがりの中に位置づけ、その違いを受け入れるのである。

日本人とネパール人では人間関係の行動の仕方が異なっているという指摘は、日本人の行動が自分の予期とは異なっていたという、自分自身の経験に基づいている。その際「ネパールは～」「日本は～」と対比させることによって違いを説明している。この対比の仕方が特徴的である。

日本人とネパール人が、行動レベルで比較されることによって、ネパール人の行動の背景にあった思考プロセスが自覚化される。なぜそう行動するのか、行動と思考プロセスとがとが結びつけられて説明されるようになるのである。こうして、比較のレベルが、行動レベルから思考レベルへと移行する。

ネパール人について、行動と、行動をうながす考え方の特性との関連を認識することで、次には、日本人についてもその行動と思考プロセスの関連が推察されるようになる。

次第に、思考プロセスという一段深いレベルで見いだした日本人の特性が、社会的文脈から解釈される。つまり、ネパール人とは異なるものとして認識した違いは、育ちの過程で獲得されるのであり、社会全体のシステムと関連しているのだと解釈する。これは、行動レベルの比較をし、それを「習慣の違い」とだけ理由づけていた段階とは、その違いが人の行動や思考をより深くから規定するものであることに言及している点で異なっている。

ここではそれまでと異なり、日本とネパールの違いについて語る時「ネパール人は～」「日本人は～」という語りのジャンル(バフチン)<sup>2)</sup>が使われていない。「日本人は」「ネパール人は」と対比し、互いが比較の対象となつてはじめて、その行動の違い、意味が明らかにしようとしていた前段階とは異なり、日本人についてだけ詳しく説明しているのである。つまり、「ネパール人」との比較によってしか照射されなかった差異がここでは前提として自明視されているために、明示されずにいるのである。

「違い」のあることを前提とすることによって、違いに隠されていた部分が新たに明らかになる。両国にある「違い」に着目し、比較し、意味づけようとしている際には、その違い以外には目が向かない。「ネパール人」と比較される「日本人」として以外の、相手の個人的特性は目立たなくされているのである。しかし、必然的な違いを前提とすることで、日本人について、ネパール人との比較によって描き出す以外の、描き方が可能になる。日本人であることによる行動/考え方なのか、それとも、その人個人の行動/考え方なのかの判断がつくようになる。それによってそれまで他者集団としてとらえていた「日本人」の中の差異、多様性に注目することができる。「日本人だから」ではない相手個人の特性に注目することができるのである。

ネパール人は、というのもないと思うんだよね。ネパール人は、と言ったら、日本人と一緒にです。…みんな一緒にですね。一人一人違う(在日12年、就職、男性)

互いが比較の対象とされていた段階では、どちらかがよいという価値判断を含むことが多かった。例えば「冷たい」日本人に否定的であったり、「のんびりしすぎている」ネパール人に否定的であったりしていたのである。両者の違いが社会的に、また、育ちに規定されているものであるとの理解が深まれば深まるほど、そうした否定的評価は留保される。個人がそれを変えることはできないほど深く内在化された特性であると知っているからである。ネパール人との違いによって明らかにされた日本人の特性が、時間的・空間的広がりから解釈されるようになると同様に、ネパール人の特性もまた、必然的なものとしてとらえられるようになっていく。それまでは、ネパール人の目を通して日本人を見る、または日本人の目を通してネパール人を見ていたといえるが、ある自分自身の視点がひとつ確立されたといえる。

ネパールから日本への移動によって日本人を見る見方とネパール人を見る見方は、互いを比較の対象としながら、変わっていくことが明らかにされた。日本人については、初め「日本人」として見ていたのが、個人として見るようになるという変化が明らかにされた。ある集団に属しているものとしての特性が強調されて、認識される他者を「社会的他者」、より個人として認識される他者を「個人的他者」と定義すると、ここで見られた日本人についての認識のされ方の変化は、「社会的他者」から「個人的他者」への移行と言える<sup>3)</sup>。

日本人についての認識の仕方を分類するために、日本人とネパール人の間にどのような違いを指摘したかによって、3つのタイプ、[他1][他2][他3]に分けた。[他1]には、＜表面的な違い＞や＜行動レベルの違い＞を指摘したケース、[他2]には、その違いを規定する＜思考レベルの違い＞を指摘したケース、[他3]には、違いを必然的なものとしてとらえ、「個人」としての日本人を強調する、または、日本人の中の多様性について言及したケースが分類された。複数のレベルの違いについて指摘したケースでは、指摘した違いのうち、最も深いレベルの違いに従って分類した。

[他1]は日本人を「社会的他者」として認識しているといえる。それに対し[他3]は「個人的他者」として認識しているといえる。[他2]はその移行期とみなされる。

はじめに注目されるのは「日本人」と「ネパール人」の間の差異である。類似点よりも相違点の方が知覚されやすい(ヴィゴツキー, 1962, p.38)のである。類似性に注目するには、その「類似性を統合する概念」が設定さ

れている必要があるためである。本研究で言えば、すでに「日本人」「ネパール人」というカテゴリー分けが一般的であるために、「類似性を統合する概念」が確立されなければ、その相違性を越えた分類をすることはできない。この類似性は、国籍によるカテゴリー分けとは別のカテゴリー分けを可能にする。

### C. 自己認識の変化

日本ににいるということを、対象者がどう意味づけているのかをみることができなのが「将来の計画」である。将来の計画には何らかの「動機づけ」とその「実現の場」を必要とする。つまり、本人が現在何を重要と考えているかと、将来に向けての現在いる日本という場との関わり方が含まれる。ここでは、将来の計画に関する、「動機づけ」「実現の場」の変化の方向を明らかにする。

今回対象となった就学生と留学生は、一名の就学生を除き、1年から2年間ネパールの日本語学校で日本語を学んでいる。しかし、日本語をぜひ習いたかったから、日本に行く目的があったから、などの積極的理由から日本語学校に通い始めた者は少ない。「たまたま近くに日本語学校があったから」「友達にさそわれたから」などの理由が多い(12名)。漠然とした関心から学び始めた日本語であっても、来日を決める時には、日本で学ぼうという意思を固めている。そして大学に入学するということがその第一段階としてとらえられており、就学生たちは大学入学を目指し、現在は日本語学校に通っている。

彼/彼女らは日本で勉強し、それを国の「発展」のために役立てたい、自分が何かをしたい/しなければと強く考えている。そうした対象者たちが日本で何を学ぶかを決める際に最も考慮するのは、日本で学んだことが帰国後「ネパールで使えるか」「ネパールの役にたつのか」ということである。将来の計画には常に「ネパール」が念頭におかれ、これから何をするのか、どこでするのか、ということは全てネパールとの関わりにおいて語られる。ネパールの現実によって動機づけられ、実現の場として想定されているのもネパールである。ネパールという「場」が最も重視されており、動機づけは外在しているといえる。日本での生活、日本で学ぶことはそのための予備的段階であり、手段である。日本は一時の「仮住まい」なのである。

次に、大学に通う留学生の将来のプラン、目的について明らかにする。留学生の中には、来日当初考えていたものとは別の分野を専攻している、という者が少なくない。漠然としていた目標が、具体化・専門化されたという変化だけではない。専門を選ぶ際の選択基準そのもの、

動機づけが変化したのである。「どこで」ではなく「何を」するかがより重視されるようになったのである。上述の就学生同様、来日当初は「それが国の役に立つのか」「国に帰ってそれを仕事にしてやっていくことができるか」ということが一番の選択基準であった。しかし、大学で様々な学問分野に接したり、アルバイトで新しい職を経験することで、他の分野への関心が芽生え、その自分自身の関心を専門を選ぶ際の判断基準とするようになったのである(動機づけの内在化)。この時実現の場は、就学生たち同様ネパールを想定しているが、日本で学ぶことは、ネパールに帰るために必要な手段以上の意味を持つようになっている。日本で学ぶことそのものが、目的の一部となり始めたのである。

さらに、「動機づけ」と「実現の場」を結びつけるものとして「内容」がよりクローズアップされていく。対象者の中には、「(ネパールに) 帰る帰らないはどちらでもよい」と言う者もいる。これは、自分が「場」よりも「内容」を重視していることを自覚していることを示している。ネパールと関連づけて理由づけする必要がない程、動機づけは内在的なものであり、それに従うことによって、実現の場がネパールでなければならないということがなくなるのである。しかし注目できるのは、ネパールに帰ることを前提としていないからといって、実現の場として日本を想定しているわけでもない。実現の場として想定されているのは、ネパールでもなければ日本でもない「どちらでもいい」(インタビューデータより)のである。自分の興味関心が中心にあり、ネパールと日本両国はいずれも、その広がりの中に位置づけられているのである。

留学後日本の企業に勤め、在日10年以上になる対象者は4名であった。皆日本人と結婚し子どもいる。このことは日本在住にももちろん大きく影響していると思われる。しかし、彼/彼女にとっては、日本に居ることは自明のことではなく、理由づけされることなのである。それは、「ネパールに帰る」ことが自明視されていた学生時代とは対称的である。なぜ日本に居るのかと聞かれれば、「日本だから」という答え方ではなく「自分が何ができるのか」を基準に答える。「ネパールだから」を理由としている現在の就学生たちとは異なっている。これは、動機づけが内在しており、「場」ではなく、「能力」を重視しているためといえる。日本を選んだ理由は、そこに自分ができることがあるからなのである。目的の実現の場が日本である必要性もネパールである必要性もないが、結果として日本に居ることになったのである。

途上国の頭脳流出が問題として取り上げられることが

あるが、国を選べば帰国、個人を選べば帰国しない、ということではないことがここからわかる。帰国しなくとも積極的に国とのかかわりを持ち続けている場合もある。帰国する/しないの違いは、深く内在する動機づけの実現の場としてより適した場がどちらであったかの違いにすぎないといえる。現在の留学生の中の、帰国すると言う者、帰国しないと言う者、その点では変わらない。国に帰ることが本人にとって重要な意味をもちば帰国する。帰国しないのは、帰国することによってできなくなることも、帰国しないことによってできることの方が重要だからなのである。しかしどちらも自己の能力を生かす場を求めていることには変わりない。どの場が自分にあっているか、自分は何ができるのか、何をしたいのか、という自分自身への問いかけをへた選択なのである。自分自身が、場を選ぶのであり、何をするのかを決めるのである。

「将来の計画」についての語りから、自分自身のことについて、始めは外在する要因から説明していたのが、次第に、自己により内在する要因から説明するようになるという変化が見られた。来日当初はネパール人であることと自己の定義は分離不可能であった。将来の計画を動機づけているものも、その実現の場もネパールとの関わりにおいて成立していた。「場」から「内容」へと重視されるものの変化と、ネパール人であることの説明の仕方の変化<sup>4)</sup>から言えるのは、自己に内在する興味関心や能力が自己を説明する際により重要になるということである。そして、ネパール人であることが無条件に持っていた重要性が弱まるということである。

自己認識の仕方が、ネパール人であることによって自己を説明する「社会的自己」からそれ以外の個人的要因から説明する「個人的自己」へと移行したといえる<sup>5)</sup>。

将来の計画の動機づけが自己に内在的である程度に従い、3つのタイプ[自1][自2][自3]に分類した。

#### D. 相補的自己・他者認識

インタビューデータより、相手を「日本人」として見ている「社会的他者」認識の段階から、「個人」として見るようになる「個人的他者」認識の段階までを、3段階に分類した。また、自己を「ネパール人」であること、ネパールとの関わりを一番の理由にしている「社会的自己」認識の段階から、自己の内部要因を重視している「個人的自己」認識の段階までを、3段階に分類した。この2種の変化を組み合わせることによって、他者認識の変化と自己認識の変化の関係を見ることができる。インタ

ビュー対象者個人を2つの認識のタイプの組み合わせごとに分類した結果が、[表2]である。

表2 自己認識・他者認識の関係性

[単位：人（男性，女性）]

	自1	自2	自3
他1	5 (2,3)	2 (2,0)	0
他2	2 (2,0)	7 (3,4)	2 (1,1)
他3	0	0	6 (1,5)

自1：「社会的自己」認識  
 自2：自己認識の移行期  
 自3：「個人的自己」認識  
 他1：「社会的他者」認識  
 他2：他者認識の移行期  
 他3：「個人的他者」認識

表の斜めのセルである，[自1・他1]に5名，[自2・他2]に7名，[自3・他3]に6名が含まれた。これらの合計18名は全体の75%にあたる。集団の成員としてカテゴライズしている「社会的他者」と「個人的他者」([自1・他1])が，次第に個人として認識されるようになり([自2・他2])，「個人的他者」と「個人的自己」([自3・他3])として認識されるという移行が同時的であるということができる。また[自1・他3]，[自3・他1]に該当する者がいなかったことから，自己認識の個人化と他者認識の個人化のどちらか一方だけが早く進むことのないことがわかる。以上からは，自己認識と他者認識の関係は相補的であるといえる。

以下，各認識の個人化の程度に従って，[自1・他1]を段階I，[自2・他2]を段階II，[自3・他3]を段階IIIと呼ぶ。

段階間の移行の要因

在日年数が長くなる程，そして日本人と接する機会が多く，日本に自分自身の活動の場を持っている程，段階が進む([表3])。これは日本で複数の生活世界(バーガー&ルックマン，1977)を体験するかどうかに関係している。複数の場での経験や日本人との出会いは，日本人の

表3 各段階の対象者の在日年数および在日活動

[単位：人]

段階	3年未満	5年未満	5年以上	就学	留学	就職
I	5			5	0	0
II	4	3		2	4	1
III	1	3	2	0	3	3

多様性を知ることにつながるが，そのほかにも，自分自身の新たな関心や能力への気づきにつながる可能性をもつものだからである。また，他者認識の個人化への移行には，瞬間的な質的転換と呼べる体験があることがインタビューデータからうかがえた。

自己認識の個人化の先行

段階I・II・III以外の，[自1・他2][自2・他1][自3・他2]は，各段階間の移行期にあるといえる。段階IIからIIIへの移行期では，自己認識の個人化の方が進んでいる[自3・他2]には2名が含まれたのに対し，[自2・他3]に含まれるケースはみられなかった。自己認識の変化が他者認識の変化に先行するといえる。

「ネパール人」という意識は，「日本人」に対するものとして認識される。従って，自分が「ネパール人」であることを意識しなくなることによって，相手を「日本人」として想定し続ける必要性が弱められると考えられる。しかし逆に，「日本人」を想定せずに「ネパール人」としての自己を意識することは少ないと考えられる。

自己認識と他者認識の関係は相補的なものであるといえるが，「社会的他者」である「日本人」が，自然に「個人」(「個人的他者」)へと脱カテゴリー化されるのではない<sup>6)</sup>。そうした他者の見えの変化の裏には，自己の見えの変化があるのである。他者の見え方は，自己の見え方に規定されるもの，自己の在り方によって変わるものと考えられることができる。

IV. カテゴリーの再構成の場としての異文化体験：理論化にむけて

カテゴリー化の機能は，人の世界の認識の仕方を，秩序づけ，意味づけるものである。自己と他者をカテゴリー化することは，自己と他者との境界を引くことを意味する。そこにあるのは自己と他者の「関係」である。

自己認識と他者認識の関係では，「社会的自己」と「社会的他者」の関係から，「個人的自己」と「個人的他者」の関係までであるといえる。

<自己認識>	<他者認識>
社会的自己	社会的他者
移行期	移行期
個人的自己	個人的他者

「ネパール人」であること，「日本人」であることが，自分と相手を説明する最も有力な理由である関係(「社会的自己」と「個人的自己」の関係)は，国籍の違いにもとづいて境界が決められ，その間の差異が強調される。個人同士の関係(「個人的自己」と「個人的他者」)にな

ると、この国という既存のカテゴリー分けによって規定されている差異は、なくなるわけではないが、強調されることがなくなる。

自己と他者の「関係」を中心的に取り上げることによって、自己認識と他者認識の個人化への移行は、国籍によるカテゴリー化が顕現しなくなるという変化であることがわかる。

「社会的自己」認識と「社会的他者」認識の関係では、自己認識と他者認識どちらにおいても国籍によるカテゴリー化が最も重要な意味を持つ。「個人的自己」認識と「個人的他者」認識の関係では、両認識において国籍による区別は顕現しない。カテゴリー化は、世界を意味づける機能をもつものであるが、両認識の移行期はそのカテゴリー化が一定でない状態、もしくは国籍によるカテゴリー化が顕現しなくなる過程といえる。

自己と他者のカテゴリー化は、自己と他者との境界のひかれ方を規定する。移行期では、この自己と他者との境界を定めるカテゴリーが固定的ではなく、そのために、自己認識は比較対象によって、ゆらぐ。他者からの接せられや、他者からその境界がひかれることによって自己の認識の仕方が左右されてしまうのである。同時に他者を認識する仕方もゆらいでいる。

「異文化体験」では、世界を意味づけるために用いられるカテゴリー化の変化が生じていると考えることができる。その過程は次の様に示すことができる。

1. 固定的カテゴリー化の段階
2. 流動的カテゴリー化の段階
3. カテゴリーの再構成の段階

「固定的カテゴリー化の段階」では、すでにあつたあるカテゴリーによって世界がカテゴリー化されている。「流動的カテゴリー化」の段階では、始めのカテゴリーと新たなカテゴリーが併存している。「カテゴリーの再構成の段階」では、新たなカテゴリーによって世界がカテゴリー化されるようになる。

文化間移動の際に最も顕現しやすい自己認識と他者認識のカテゴリーは、国籍カテゴリーである。「何々人」としての自分、「何々人」としての相手が最初のカテゴリー化によって顕現する。ステレオタイプ的にまず認識されるのである。そのカテゴリー化からの離脱、ステレオタイプから個人化への移行が、相手の見方についても、自分の見方についても生じているのである。

## V. 終章

### A. 関係からみる自己・他者認識：3事例の解釈

「関係」の変化としてみることで、冒頭の〈事例1〉で、なぜ客の対応にショックをうけたのか説明をすることができる。この対象者は認識の移行期である段階IIに位置している。彼はそれまで一従業員として店の決まりに従った対応をしていたのである。それは「従業員」と「客」の関係であった。それが、客の「ここは日本なんだから」ということばによって、突如として「日本人」としての相手と「外国人」としての自分とが現れる。客のそのことばによって「外国人」としての自分を自覚せざるをえない。その時同時に相手は「客」である以上に「日本人」として現れたのである。「ネパール人」としてではなく生活している場に、突然「ネパール人」という「社会的自己」としての自分が顕現し、「日本人」である相手との間に越えられない距離ができる。相手から一方的に境界をひかれ、そこになかった境界が突然顕現し、その差異を意識せざるをえないことに「ショック」を受けたのである。

〈事例3〉では、そうした相手の出方に対し「日本人がまるきりそういつているんじゃないくて…個人によってちがうから。この人わかっていないんだな」とうけとめている。この対象者は段階IIIに位置している。「個人的自己」と「個人的他者」としての自分と相手との関係が確立されることによって、自己認識のゆらぎはなくなり、相手のことばも、「日本人」のことばとしてよりも、相手個人のことばとしてうけとめているのである。

在日中に、日本人についての見方、ネパール人にたいする見方、さらに自分自身についての見方にも変化が生じる。その変化は、それまでとは異なる新たな関係をそれぞれの相手ともつようになることを意味する。つまり、場や相手によって自己認識の仕方が変わるのである。自己認識と他者認識の個人化は、そうした不安定な段階を経てなされるものといえる。段階IIIに分類された〈事例3〉の対象者の次のことばが、その段階の乗り越えを示している。

前だと、すごくまわりのこと気になってたんだけど、まわりの人私のことどう思うんだろうって。でも、ある時にね。今から一年もたつてないころ、7、8ヶ月前(在日3年)にそのこと気がついたので。人間って、やっぱりまわりを見て生きるべきじゃなくて自分を見て生きるべきだと。自分の見方で変わってくる。…すごく気になってるんですよ。あれ、何だろう、どうだろうって。すてきな人もたくさんいる。「何々人」ってこだわることは全然ない。その人間、その人間ちがうから。難しいよね。でも、どうも人間ってバックグラウンド気にするんですよ。そういうのって、自分が一生懸命考えないとわからないのよね。



複数の潜在的自己のなかから顕現する自己は、相手によって、場によって変わる。とくに相手の自分への認識の仕方が、自分のそれと一致しないときに、心のゆらぎは大きい。しかし、そうした複数の自己認識を経験することを通して、国籍によるカテゴリー化という一つの認識の持つ特権性が弱まったといえる。そのことによって、自分自身のほかに相手についても、多様な認識の仕方が可能になる。複数の自己認識・他者認識の可能性の中から「自分の見方」を選び取ることができるようになるのである。

## B. 「関係」と「変化」の心理学

文化の違いを明らかにするのではなく、当事者(個人)がそれをどう受けとめているのかを明らかにすることを出発点にし、それを一連のプロセスとして明らかにした。

自分を何者と、相手を何者と見ているか、そしてその両方を同時にとらえるために、これまでは焦点化されることのなかった「関係」をひとつの分析概念として提示した。この「関係」の在り方の違いを類別し、「関係」の変化を明らかにした。

ある場面での「関係」は唯一絶対のものではない。人は多様な「関係」の在り方をもち、同時にその「関係」をつくりかえる可能性をもっている。自己と他者の境界のゆらぎを通して、複数の潜在的自己の把握・受容・統合へと進む。本研究では国籍カテゴリーが顕現しなくなるという変化を明らかにしたが、日常には多様なカテゴリー分けがある。認識の仕方を変えるという体験を一度へることは、次に顕現するカテゴリー分けもまたひとつの認識の仕方であり、相対的なものにすぎないという意識をもつことにつながるかもしれない。

これは自己の解体と乗り越え(脱構築と再構築)のプロセスといえる。環境に能動的にはたらきかけるものとしての主体の意味世界を描くことを目的としたが、そうした個人は解体と再構築をくりかえす存在として、常に変化の途上にあるのである。

(指導教官 箕浦康子教授)

## 謝辞

インタビューに応じて下さったネパールの方々を中心に感謝申し上げます。また、ネパールとの関わりのなかで、ご協力くださった皆様にお礼申し上げます。

## 注

- 1) ネパール王国は、インドと中国の間に位置しヒマラヤ山脈を有する。多民族、多言語国家である。国連により後発開発途上国のひとつとされている。
- 2) 「語りのジャンル」(バフチン)とは、発話の内容、テーマ、構成、スタイルの安定した類型のことであり、発話に一定のまとまりを与える機能を持つ(茂呂, 1991)。
- 3) 一方、ネパール人については、より客観視するという変化が見られた。それは、それまで個人として見ていたネパール人を「ネパール人」としても見るようになったということである。これは「個人的他者」としても「社会的他者」としても見ることができるようになった変化とすることができる。
- 4) 自分がネパール人であることの説明の仕方も、ネパール人であることが自明である段階から、習慣や食の好みなどから説明する段階、そして自覚的に現す段階のあることが明らかにされた。
- 5) 個人の自己概念を「集団的基盤から」説明することで、社会的要因と心理過程の関わりに注目しているのが社会的アイデンティティ理論(Social identity theory)である。本研究の「社会的他者」はその社会的アイデンティティ(social identity)の部分が強調され、「個人的他者」はその個人的アイデンティティ(personal identity)の部分が強調されたものといえる。  
社会的アイデンティティ理論は、自己を個人的自己から社会的自己までの連続体として想定しており、その点では柔軟であるが、一方の他者については、外集団の一員としてしか設定されておらず、本研究でみられたように外集団の一員としてカテゴライズされていた他者が個人として認識されることは想定されていない。本研究では「社会的他者」が脱カテゴリー化され「個人的他者」として認識されるようになることが明らかにされた。  
自己カテゴリー化の程度が内集団と外集団の評価に影響しているということから(Abram & Hogg, 1990)、他者認識の変化について説明するためには、自己認識についてもあわせて見当していく必要があることが示唆される。つまり、自己認識と他者認識において顕現するアイデンティティの変化を十分にみるためには、二つの認識の両方をそれぞれの両極を含め同時にとらえる必要があるのである。
- 6) 自己認識の「個人化」、他者認識の「個人化」ということばを用いてきたが、それは「ネパール人」「日本人」という認識の仕方(カテゴリー分け)が顕現しなくなるということを示すために用いている。初めのカテゴリー分けが顕現しなくなるということは、新たなカテゴリー分けがより重要になっていると考えられる。純粋に「個人」であると考えことはできないだろう。本研究では、その新たなカテゴリー分けについては、「日本人」「ネパール人」でない以上その内容を検討することはできない。しかし、大きな意味を持っていたひとつのカテゴリー分けが無化されるという変化であることは確かである。

## 引用文献

- Bandlamudi, L., 1994, Dialogs of Understanding Self/Culture. *ETHOS*, 22 pp.460-493.
- Dawson, J.L.M., 1967, Tradutional versus Western Attitudes in West Africa : the Construction, Validation and Application of Modern Measuring Device. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, 6, pp.81-96.
- Dawson, J.L.M., 1969, Attitudinal Consistency and Conflict in West Africa. *International Journal of Psychology*, 4, pp.39-53.
- Cox, L.M. and Lyddon, W.J., 1997, Constructivist Conceptions of Self : A Discussion of Emerging Identity Constructs, *Journal*

- of Constructive Psychology*, 10, pp 201-219.
- Oberg, k., 1960 Cultural Shock : Adjustment to New Cultural Environment *Practical Anthropology*, pp 177-182
- Shweder, R.A., 1990, Cultural Psychology-What is it ? In Shweder, R.A., Stigler, J W and Herdt, G (Ed.), *Cultural Psychology : Essays on comparative human development.* . Cambridge University Press.
- Torbiorn, I., 1994, Dynamics of Cross-Cultural Adaptation in Gary, A. (ed), *Learning Across Cultures.* : NAFSA : Associations of International Education
- Zeng, B and Berry, J.W, 1991, Psychological Adaptation of Chinese Sojourners in Canada *International Journal of Psychology*, 26-4, pp 451-470.
- ヴィゴツキー, L.S, 1962 柴田義松訳『思考と言語 下』明治図書出版
- コール, M., 1982 若井邦夫訳『文化と思考』サイエンス社
- バフチン, M., 1980 北岡誠司訳『言語と文化の記号論』新時代社
- バーバー, P.L., バーガー, B, ケルナー, H. 1977 馬場伸也・馬場恭子・高山真知子訳『故郷喪失者たち』新曜社
- ワーチ, J.V, 1995 田島信元・佐藤公治・茂呂雄二・村佳世子訳『心の声—媒介された行為への社会文化的アプローチ』福村出版・
- 箕浦康子, 1990『文化のなかの子ども』東京大学出版会
- 箕浦康子, 1991『子どもの異文化体験』(新装版) 思索社
- 茂呂雄二, 1991「語り口の発生」『ことばが誕生するとき』新曜社